

# 冒険者たち

2021年12月 第98号  
編集：山本泰暉

誰かの心の雲にかかる、虹となりなさい。  
マヤ・アンジェロウ

## 念願の高校入学式。

### 横浜市／小森美登里さん

吹奏楽部にあこがれて入学した高校でいじめに遭い、15歳7か月という生涯に自ら幕を下ろした小森香澄さん。星になった少女が遺した愛のメッセージ。その命の軌跡を、母、美登里さんがつづる。



# 天国の娘に会いたくて

## 愛する香澄へ。お父さんとお母さんより。



小森美登里 (Midori・K)

神奈川県出身。NPO法人ジェントルハートプロジェクト理事。1998年、高校入学間もない一人娘の香澄さんを、いじめによる自殺で失う。いじめのない社会、あたたかい学校と教室を目指し、展示、講演、学習会などを全国で展開する。

## 娘の苦しみを感じて。

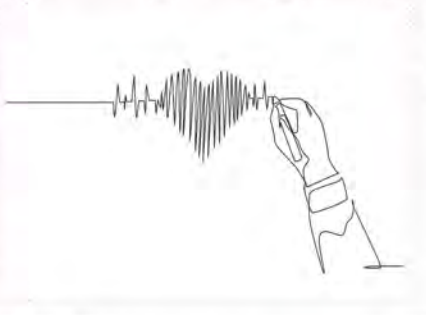
あの時点では、個人的ないじめが存在するという認識は持ていなかった。しかし、同じパートの子が凄いきついものの言い方をするんだよね。それがとてもつらい・・・」その言葉を聞いて、ようやく事の深刻さに気づき始めた。それ以降、日を追うごとに学校に遅刻するようになった。5月に入ってから、学校を休む日が続いたのです。

5月16日。香澄の言葉が気になり、このとき初めてクラスの担任に相談に伺った。「担任の教諭は、吹奏楽部の顧問でもあったのです。」トロンボーンの子たちがすごく言葉がきつい。我が子に聞いた事実をそのまま伝える。三人の加害生徒は、香澄とクラスも一緒だった。一宜しくお願いますと、頭を下げて後にしました。

6月4日。他にできることはなにかと考え、横浜市青少年相談センターに電話で予約した。「娘に行く?と聞くと、"行きたい"と即答でした。」その反応に、娘の苦しさを強く感じ、大きな不安を覚える。「娘はアトピー性皮膚炎をもっていたのですが。」その症状が、かなりひどくなっていた。ツルツルだった肌が次第に悪化していく。「精神的な作用が大きいことは本人が一番感じていました。」皮膚科ではなく、メンタルクリニックに行きたい。メンタルクリニックの医師は、一時間も時間を採ってくれた。「いじめている生徒たちの名前が、何度も何度も繰り返し出てきたのです。」その足で学校へ。担任に、我が子に起きていることを報告するためだった。

## 教師の無関心 落胆と絶望に追い詰められ

6月14日。吹奏楽部一年生の親の親睦会があった。「父母会の会長より、部活内にいじめが存在していることの報告があったのです。」学校も保護者も動いてくれる。きつとみんな乗り越えられるはず、と期待が生まれた。その二日後の保護者面談。「担任には、メンタルクリニックの話をもっと詳しくしよう」と思い、臨みました。「返ってきた言葉に、胸がすくむような思いがした。でも、このままだと単位が足りないんですね。最近ノートとらないですし・・・」授業中うわのそらなんです。この言葉を聞いて、香澄がどれほど落胆したか。相手への信頼が、足元から崩れるような思いだった。



## 手紙

香澄を学校に行かせたくない。母である私も、精神的に追い詰められていたのだと思う。「毎朝の出欠の連絡をしばらくやめたいと、吹奏楽部の顧問に申し出たのです。」それでも連絡してください。それは、義務なのか。余りのショックで、階段を下りながら涙が出てきた。「一番つらいのは香澄だから、手紙を書いたんです。」《学校へ行けなくても大丈夫だよ。どんな香澄でも、お母さんは愛しているよ。》その手紙は亡くなった後、香澄のカバンから出てきた。



## イルカが見たい 打ち明けられた言葉の暴力

クラス替えを要望したが、その約束はできないと言われた。「この頃、家に気になる電話がかかってきていたのです。」うん、わかった。そつする。という相づちのあと、「じゃあね、バイバイ」と明るく電話を切る娘。部活の連絡網だというその電話は長い時には10分以上。そしてその電話は、次に回されること、言葉の暴力が前からあったことを話し始めた。顔が醜い、早く治せ。汚い顔を治してから学校に来い。あなたがいるとコンクール勝てないんだよね・・・それを聞いた私は激怒し、怒りに体が震えた。そして、あまりに香澄が不憫で、可哀そう。我が子の手を握り締め、二人で電車の中で人目もはばからず、ポロポロ泣いた。

7月15日。朝から制服を着ているが、ほとんど口をきけない。9時頃、小さなことから親子で口論になってしまった。「私がついて、大人の理屈を言っただけです。」私に反発した香澄が、家から飛び出そうとした。「どこへ行くの!」香澄を抑えて居間に戻す。家から出て行くこととする香澄はなお力を緩めない。頼むから、落ち着いて。2、3歩後ろに下がると、次の瞬間、ポケットからカッターナイフを取り出した。やめて!お願いだから!カッターナイフを持ったままの香澄を力づくでおさえる。お願いだからやめて。泣きながら懇願した。香澄はへなへなとその場に座り込んでしまった。体は震えていた。



# 娘の手を握りしめ

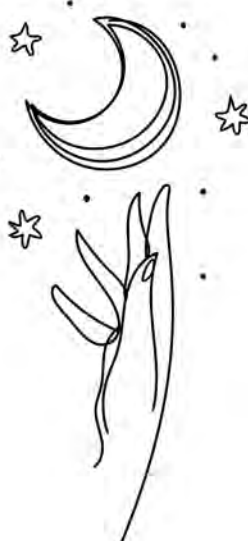
## 「優しい心が一番大切だよ」

### 第二章 ～天国へ旅立った香澄～

水族館に行ったあの日、自由に泳ぎ回るイルカの姿を見て、香澄は何を思ったのだろう。どこまでも優しく、美しい心に生まれた娘の命は、私の腕の中から零れ落ちていった。あるメッセージを残して。

#### 娘が遺した言葉 二人で歩いた夜道の思い出

7月17日。制服に着替えて、そのタイミングを見計らっているようだった。覚悟と勢いがなくと玄関を出ることができない娘を、私はなぜか強く抱きしめなかつたのだろう。  
「一緒に家を出たのですが、少し歩いたところで、どうしても足が先へ進まないのです。」  
7月18日。終業式が終わった時間に学校を訪ねた。  
担任の教諭は6月から学校を休んでいた。代わりに引継ぎの教諭に香澄の現状を伝える。  
「その晩、学校からはじめて電話がかかってきました。」  
いじめで苦しみはじめて以降、担任本人も香澄から相談を受けていたとのこと。  
「しかし、ぎつと大丈夫でしょう」と言っています。  
信じられなかった。  
夏休みになっても部活に行けず、自宅で一人、CDに合わせてトロンボーンの練習をしている娘を思った。



7月23日。コンクール当日、学校には行くことしない。集合時間が迫ってきても動こうとしなかったが、ギリギリの時間で腰を上げた。  
行くのか行かないのか、急かしてはいけない。でも、香澄が行かないと吹奏楽部は出発できない。コンクールに空をあげてしまった場合、香澄は自分をどう責めるかわらない。  
あらゆる思いが私の頭の中を駆け巡った。  
7月24日。やはり「怖くて学校に行けない」。

午後から青少年相談センターへ行くこと、「もう割り切ったから大丈夫です。」と言った。  
学校に行けないと言った香澄の言葉とは信じられなかった。  
帰りがけ、喫茶店で急にいじめの内容を話し始めた。  
「八景島の帰りに聞いた内容とは別のものだったのです。」  
いつも無視されていたこと。  
髪型についての文句、下着の色から、生活全般にわたる細々としたことまで・・・  
そこへ、加害生徒から電話がかかってきた。その電話を録音し、部活の外部指導者のもとへ。  
「この先生は、香澄がもっとも尊敬していた人でした。」  
香澄は自分からは話さない。代わりに私が、いじめの内容を一つ一つ伝えていく。

「命を無駄にするなよ、絶対死ぬな！」その指導者は、香澄を強く抱きしめてくれた。  
その夜、香澄は明るい笑顔を見せて、夜中まで夫と三人で色々話した。「明日こそ絶対に学校行くから起してね。」  
そう、明るく言って眠りについたのだった。

7月25日。香澄はいつもより明るく、朝七時に起きた。だんだん落ち込んでいく。庭をほかに眺めたあと、いつもどおりに制服を着て、トロンボーンを隣に置き、玄関に座り込んでしまった。やはり学校へ行くことができず、主人と家を出て、途中で足が止まり、「怖い」と言ったという。  
心配になって見に行くと、二人は道の途中で座っている。  
歩くこともできない香澄は、夫におぶってもらい、三人で家に引き返してきた。  
帰った後、トイレに入ったまま出てこない香澄に、私は大丈夫？と何度か声をかけた。  
とても暑い日だった。  
そこに、主人の大きな叫び声が聞こえてきた。  
「馬鹿ッ！何やってんだ！」  
救急車を呼んだ。香澄は動かなかった。

### 「優しい心が一番大切だよ。その心を持っていないあの子どもたちが可哀そう」

香澄へ。  
香澄の声が聞けなくなって、肌のぬくもりを実感することができなくなって、笑顔が見えなくなって。怒ってすねたその背中に、手をかけてやることができなくなっている・・・  
そして、一緒に将来の夢を語ることができなくなって、二十年以上が経ちます。  
あのとき、なぜ香澄をきちんと守ってあげられなかったのか。お父さんとお母さんは、香澄に謝りたい気持ちで一杯です。  
一人でいじめに耐えて、どれだけ恐ろしかったか。誰も助けてくれず、どれだけ辛かったか。大好きな友達に会えなくて、どれだけ悲しかったか。  
親として、後悔しない日はありません。香澄のことをいじめにくる生徒に、無理やりでもいじめをやめるように、言いに行けばよかったのです。  
優しい心をもっている香澄だからこそ、深く深く心が傷ついていたはず。最愛の娘を守れず、私は母親としていつたい何をしていたのでしょうか。  
15歳と7か月。その短い人生の先には、たくさんの楽しいことが待っていました。  
高校を卒業したあと、色んな経験があったはず。  
彼氏ができて、結婚して、子どもが生まれて母になって。  
その未来を終わらせてしまわうらい、一人でつらい思いを背負わせてしまったのですね。  
もっとたくさん楽しい思い出を作ってあげればよかった。  
もっとたくさん楽しい思い出をもっとたくさん、好きなことをさせてあげればよかった。  
お父さんとお母さんは、今でも香澄のことを愛しています。  
いつか会えたとき、強く強く抱きしめてあげたい。  
それまで少しの間、どうか天国で待っていてください。  
香澄。私たちの子に生まれてきてくれて、ありがとう。

静かに旅立った香澄  
寝顔は白雪姫のように美しく  
7月27日。夫の誕生日。救急車で運ばれ、集中治療室へ入っていく香澄。その背中を追いつつ、娘の無事を、祈ることしかできなかった。  
「翌日、主治医に呼ばれ、脳死状態と宣告されました。」  
香澄の死を目前に感じた。現実が遠くのように感じ、見舞いの言葉は入ってこなかった。  
看護師や医師を見つけて、香澄は悪くない、いじめた子どもたちが悪いのだと切々に訴える。どうして香澄がこんな目に遭わなければならぬのか。  
何も悪くないこの子が、いったい何をしたというのか。  
校長がやってきた。香澄の傍へ行くように勧めても、後ずさりをして離れて行った。  
この日の午後、吹奏楽部の顧問が部員たちに対し、  
「小森香澄が自ら命を絶とうとした。その原因は部活内の人間関係にある。」と報告した。



7月27日。夫の誕生日。夜中の0時、香澄のベッドを挟んで手をつき、三人でハッピーバースデーを歌った。  
香澄と一緒にいる時間をすこしでも逃したくない。優しい寝顔を家から送り出す。  
翌日、お別れ会のために家から出ていく香澄を見送ることができず、台所に引込み、香澄に背を向けて大泣きした。  
最後に香澄の写真を撮った。吹奏楽部のTシャツとトレーナーをかけて。午後三時過ぎ、香澄を家から送り出す。  
申し訳ありませんでした、と泣き崩れる担任。先生だって一生懸命やってくれたじゃないですかと慰める私。  
この担任が一度も指導していなかったというのを、私はまだ知らなかった。  
7月30日。告別式。香澄との本のお別れのとき。阻止したい。やめてほしい。引き離さないでほしい、それでも、その時は来てしまおう。  
最後に、夫と私は香澄を両側からはさみ、「生まれてきてくれてありがとう」とキスをした。  
あふれる涙を抑えることができなかった。愛する娘。私たちの香澄。無理やりすぎる別れに、胸が引き裂かれた。

『いっぱい遊んだね』  
旅立つ瞬間に聞こえた香澄の“声”  
別れ  
下がり続ける心電図の音波を聴きながら、その現実を止められない自分をくやんだ。  
香澄、逝かないで。  
「いっぱい遊んだね」  
香澄の声が聞こえた。  
香澄、お別れなんかじゃない。これからはずっと一緒だよ。  
涙は出なかった。  
その夜、香澄とともに家に帰る。家族三人で静かに、一緒のときを過ごした。  
翌日、お別れ会のために家から出ていく香澄を見送ることができず、台所に引込み、香澄に背を向けて大泣きした。  
最後に香澄の写真を撮った。吹奏楽部のTシャツとトレーナーをかけて。午後三時過ぎ、香澄を家から送り出す。

# 遺族が訴えたかったこと

## 第三章 ~ 悲しみと孤独との闘い ~



大粒の雨の「涙」  
流れ星の「さようなら」

小さなお骨になって戻ってきた香澄は、とても軽かった。今までの苦しみと悲しみから、やっと解放してあげることができたのだろうか。

手の中にいる香澄に、心の中でおかえりと囁いた。

その日の夕方、ひどい大雨が降った。人生で初めてと言っていいほどの土砂降り。

鎌倉街道が封鎖され、タクシーもバスもすべて止まった。香澄のそれまで受けてきた痛み、我慢してきた涙が、洗い流されたような雨だった。

8月2日。死亡届を提出するために区役所へ。

カウンターの書類を出し、その作業を見ていた時、香澄の名前に大きなバツ印が付けられるのを見た。カウンターから振り返りざま、夫が泣いているのがわかった。何もバツ印なんかつけなくてもいいじゃないか！

初七日。香澄にお線香を上げに来てくれた友達を見送りながら夜10時過ぎに外へ出た。

そのとき、夏の夜空に一筋の光が瞬いた。とても大きな流れ星を夫と見上げた。今まで見たことのある流れ星の中で、一番大きな流れ星だった。

天国の香澄が、さよならを言っていた。香澄は今、天国にいるのだと思った。



### 学校組織の隠い 香澄の苦しみの真実を求めて

香澄の状況を12回にわたり学校に説明に行ったにもかかわらず、一度も指導しなかった学校が「学校管理下でない」という理屈がどこにあるのか。

第一回の「質問書」を校長に提出した。8月16日、質問書の内容の回答を得るべく、夫婦で校長室へ足を運ぶ。

「個人に対する指導はできかねる。」「個人の責任追及は人権侵害にあたる。」「顧問や私の責任問題になってしまつて。」「という言葉がもたらした。

香澄の心が壊れるまで、いじめをやめなかった加害者生徒。そして、生きる意味を感じられなくなるほどポロポロになつていく姿を知りながら、いじめを傍観しつづけた教師たち。

誰も助けてくれない。その孤独と恐怖に怯えながら、それでも最後まで優しい心を手放さず、自ら命を絶つたのだ。

香澄はもう戻ってこない。あなたたちに、この孤独とさびしさが分かりますか。

もう二度と、あの体を抱きしめてやることはできない。

親にとつて、これ以上の悲しみはなかった。

争い。それは香澄が望む姿ではないかもしれない。

しかし、なぜ香澄は死ななければならなかったのか。

香澄に何が起きたのか、その真実だけは知りたいのだ。

せめてもの救いは、心からの謝罪だった。

でも、それはなかった。

### 孤独

香澄が旅立った直後に何度か来てくれていた父母会の人は、一人も電話に出なくなった。

「香澄の学校での様子を教えてください」と、子どもたちに手紙を送っていたのですが、

返事は一度もなく、茶封筒に入られて送り返されてくる。

友達も、父母会も、誰一人として線香を上げに来ない。

12月4日、香澄の大好きだったサイパンの、とびきり美しいサンゴ礁のころへ散骨。

香澄、早く会いたいよ。

真っ青な海の中へ、香澄は何の迷いもないようにまっすぐ姿を消していく。コンクールに出場した記念に買ったペンダントも一緒だった。

1999年、2月14日。

父母会の集まりに二人で参加した。調査の協力を得たい一心でその場に臨んだが、しかし、

「こちらの立場も考えてください。」父母会世話役の、凍り付くような一言に、足元が崩れ去るような感覚がした。

帰り道。JRの駅のホームで線路を見つめながら「死ぬ」と思う。

もはや誰も味方はいなかった。学校はおろか、支えと思っていた人々も、手のひらを返したように見離れていく。

夫婦二人、離れ小島。

どうやって、自らの人生の終止符を打とうか。その考えが心を支配していく。

香澄が呼んでくれたら、すぐにでも天国に行きたかった。

夜空を見上げては、あの星の中どこに香澄がいるのだろうかかと泣く。

その夜、夫にこう告げた。

「私は、自分の命は自分で始末つけるから。」

うん、いいよ。そうしよう。それが夫の答えだった。

### 訴訟を起こした理由 香澄の正義を勝ち取るために

「もういいよ、やめて。私は許しているから」そう香澄が言っていることが、私たち夫婦にはわかっていない。

だからこそ、香澄の意に沿う形で人権擁護委員会へ申し立てをした。しかし、二年二月におよぶ調査の結果、「警告」という最も重い処分を受けたにもかかわらず、誰一人謝ってくる者はいなかった。

「加害者3人の言動が死の要因であることは否めない。」

その一文をもつて、校長にいじめの存在を追求すると、

「いじめ」という言葉はどこにも消えていく。同じ人間の言葉とは思えなかった。

それどころか、事件の原因を、香澄自身の責任にしようとする者さえ出てきた。

幸せになる権利をもって生まれしてきた香澄がその権利をいじめにより奪われ、亡くなった後もその人権を侵害される。

親として、それだけは許せないことだった。宇宙の星になった香澄は赦すかもしれない。

しかし、親はこのことに対し、このままにしてはならないと強く思ったのだ。

2001年7月23日、記者会見。物証がなく、目撃者の協力が得られない裁判だった。

「本当に求めたいのは加害者からの謝罪です。」

夫のその言葉がすべてだった。世界中のお金を積まれたとしても、私たちの一番の願いは香澄を生き返してここに戻してほしいということだった。

「いじめ裁判は、勝ち目がない裁判と言われていました。」

言葉によるいじめは目に見えない物証としては存在しない。目に見えない傷に対する判断ということになる。当然、厳しい戦いが予想された。

「弁護士からは、お金と時間をつき込むことになりまよ、と言われました。」

それでもいい。

これは、香澄の親である私たちが、香澄の正義を勝ち取るための闘いだった。そして、

「私たちが勝つことで、次に続く人々への有利な判例を残したいと思つたのです。」

勝つて積み石の一つになろう。夫婦で誓い、提訴した。

相手は学校、すなわち県を相手にした行政裁判だった。

### 判決

人として当たり前の思いを受け入れ、子どもたちを反省させ、いじめを放置したことを心から詫げれば、この裁判は間違いなくなかっただろう。

「心の傷でも、人を死に追い詰めることがあることを、証明するための裁判でした。」

2006年3月28日、横浜地裁で一審判決。3名の加害者生徒のうち一人に56万円、県に330万円の賠償命令。ただし、いじめと自殺との因果関係は認められなかった。

しかし、この判決は「勝訴」だった。そしてこの判決で、香澄や私たち遺族に対しての過失は認められなかった。

加害生徒と県は控訴してきた。高裁の和解勧告に対して私たちが出した条件は「(香澄の自死)直後に行った調査書類を開示すること」だった。

香澄に何が起きたのか。それを知るためにはじめた闘いだった。だからこそ、真実に触れることが願っていた。

固有名詞を塗りつぶされ、大幅に削減された調査書類の、あまりに薄い言葉たち。

しかし、そこには香澄からいじめを受けていることを相談されていた子どもたちの、わずかな綴りが見えた。

学校という巨塔の中で、真実を伝えるべく筆を執った子どもたちの筆跡だった。

「いじめは無かった。」

10年前、我が家に来て校長が言った台詞は、嘘であると証明されたのだ。



### 「香澄、早く迎えに来て」 真っ青な海の中へ 姿は消えていく

「香澄、早く迎えに来て」

真っ青な海の中へ

姿は消えていく

情報公開への分厚い「壁」 ~「親の知る権利」はどこか~

弁護士とともに始動した情報公開請求。

「小森香澄にかかわる事故報告書」という形で提出したが、行政から返ってきた書類は、ほとんどの情報が黒く塗りつぶされたものだった。その理由は、「死んでいる人間は自分の情報を請求することができないから」とのこと。

青少年相談センターでも同様。自分の子どもが、自身の口でいじめの内容を相談したものを、親が見ることができない。

学校の職員会議議事録については、「記録が作成されておらず、当該公文書が存在しません」。遺族が公開請求をしても「不存在」ということで、当然あるべき書類の開示が不可能になってしまう現実がある。

日本の司法において、我が子の身に起きたことを親が知る、「親の知る権利」が認められることを願う。

# 香澄が遺したメッセージ

## 第四章～いじめのない社会を目指して～

正義を伝える教育を。

「天国の子どもたちの声を聴け」

言葉は人の心を温める宝物にもなり、心を傷つける凶器にもなる。肉をナイフで切れば血が出るように、心も血が流れると死んでしまう。体と心が一つそろうと命。それを伝えるのが教育だと思っ

心とは何か  
理由があれば傷つけても良い？

今から24年前、横浜のある高校に、小森香澄さんという女の子がいた。

香澄さんは大きな期待を胸に、小学生の頃からあこがれた高校に入學し、トロンボーンを吹いていた。ところが入学して間もなくいじめに遭い、15歳という若さで命を絶つた。

「優しい心が、一番大切だよ。そんな、風のような言葉を残した彼女が自らの生涯に幕を下ろすとき、何を思っただろう。きつと、恨みの言葉ではなく、感謝や思いやりの言葉だったのではないだろうか。

人は一人では生きていけない。その愛を、多くの人へ届けるために星になった彼女は、私たちに何を問うだろう。



私たちは皆、自分が正しいと思っ

て生きている。自分と相手の違いを認めることは、大人でも難しいことだ。

しかし、理由があれば人を傷つけて良いのだろうか。

「いじめで亡くなった子どもたちは皆、あなたか家庭に育った、優しい心の持ち主だったのだと思います。」

「自分がされて嫌なことや、つらいことは、他の友達にしてはいけませんよ。」

そんな常識的な心を両親によって培われた、非暴力の心をもった子どもたち。

彼らは果たして、何かの理由のために、誰かの心を傷つけることをしたのだろうか。

「人という生きものは、孤独がとても苦手です。ずっと無視されていると、心が透明になってしまします。」

「私たちはいじめを、心と身体への暴力と定義しています。」

言葉で相手の心を傷つける。それは目に見えなくても、立派ないじめなのだ。

「優しい心が一番大切だよ。その言葉は、彼女の心の灯火が消える瞬間の、最後の訴えだったのかもしれない。

人は一人では生きていけない。そのことを、友達に裏切られてもおお、きれいな心のまま残すことを選んだ。

親には言えない  
子どもを苦しみから救うには

大人が子どもに言う言葉に、「何かあったらすぐに大人に相談するように。」がある。

しかし、いじめられている本人は、すでに人に裏切られたという心の傷を負っている。

学校でいじめられていることを親に告白するには、その現実を受け止める苦悩を、さらに乗り越える必要があるのだ。

「親には言えない。」  
それが、いじめられている子どもの本音である。優しい子であるほど、親の安心を守りたいと思つもの。

「大人に相談して、チクッたということになれば、いじめがひどくなるという『恐れ』もあるかもしれない。」

だから、誰にも相談できない。周りで見ている子どもたちにも同じことが言える。

「だから、相談されるのを待たず、周りにいる大人が、いじめの可能性の『発見』に努めなければならぬのです。」

それが、子どもたちを取り巻く偽らざる現実である。

では、具体的な行動として何ができるだろうか。

「私を助けて。あのいじめを今すぐやめさせて・・・」

「加害者は、相手が嫌がっていることを『自覚』している場合が多い。誰かを傷つける側にいることで、自分が被害者になる不安を払しょくする。」

真実を味方に  
教育に「心」を取り戻すため

加害者に対してどう向き合うか。これは私たち大人が責任を引き受けることである。

「この問題を解決するために、私たちは学校の先生を支えなければなりません。」

子どもの最も近くにいる先生。その先生を応援するとき、大前提となる必要がある。

「一切の嘘があつてはならないという事です。」

生徒の身に異変が起きたときに、すべての事実を、即座に学校と親で共有する必要がある。

「その結果、水面下でいじめが悪化する恐れもあります。」

いじめられる側に、いじめられて良い理由など存在しない。

「あなたも何か、悪いことしたんじゃないの・・・？」

この一言に、多くの子どもたちが傷ついていることを、大人たちは知っておきたい。

では、いじめ対策として正しい選択とは一体何か。

「それは、いじめ加害者にいじめをやめさせることです。」

『窓の外には』

窓の外には夢がある  
夢のとなりは自然がある  
自然の上には空がある  
空の上には星がある  
未来の向こうに愛がある  
愛の中には心がある

窓の外には夢がある、夢のとなりには自然がある、自然の上には空がある、空の上には星がある。

私達が生きる地球という船で例えどんな事があっても希望を見つけて生きていければ笑顔はきっと戻ってくる、明日の朝日胸に抱いて

思い出、手の中握りしめてまた明日一つ夢を見る星の向こうに未来がある、未来の向こうに愛がある

愛の中には心がある、優しい心がそばにある

私達が歩む大地の上で例えどんな事があっても愛という芽を育ててゆけば幸せはきっと花を咲かせ、未来の命つないでゆくよ

思い出、手の中握りしめてまた明日一つ夢を見る星の向こうに未来がある

自由の翼力強く、そしてまたひとつ大人になり

優しい心に飛び込もう、窓の外には夢がある

『窓の外には』合唱



感謝

高校を卒業した美登里さんが、横浜のマーチングバンドに入ったのが19歳。そこで出会った新一郎さんと結ばれ、24歳で二人は結婚した。

1982年、12月22日、小森家に長女が誕生した。名を「香澄」と名付けた。

小さい頃、お母さんとスパーに行くのが楽しみ。試食コーナーを物色する娘を、たしなめるお母さんの姿。

幼稚園に入ると、色々なものに興味津々。友達ができても、やっぱり争いごとが苦手だった。

はじめてサイパンに行ったのは年長のとき。あまりの海の青さと美しさ・・・あの感動はずっと忘れない。

中学生になると、吹奏楽をはじめた。お父さん、私にリズムの楽しさを教えてくれて、どうもありがとう。

振り返れば、数えきれない思い出があふれだしてくる。お父さんとお母さん。二人のそばにいられた時間が、私はこんなにも幸せだった。

流した涙も、笑顔も、たくさんの愛に繋がっている。だからどうか、泣かないで。音楽によって結ばれた二人のもとに、私は生まれた。やさしい心。それが私の両親から授かった愛だから。父母と手をつなぎ、すべての子どもたちへ贈りたい。自由の翼、力強く。お父さん、お母さん。これからずっと一緒に。そして、ありがとう。(完)